

ワクワク留学体験記

ディズニーリサーチ ピッツバーグ ～ Disney Research Pittsburgh (DRP) ～

玉城絵美（東京大学）



研究所内の HCI グループメンバー。ポスにはモザイク加工

1. はじめに

今回、ディズニーリサーチピッツバーグ（Disney Research Pittsburgh:DRP）での留学体験を本誌に執筆するに際して、研究所内での研究活動を具体的に記述できないことを先にお詫び申し上げる。

ディズニーリサーチに行くきっかけは、2010 年に開催された国際学会 Tangible Embedded and Embodied Interaction 2010 (TEI2010) の Graduate Student Consortium であった。この Consortium は、学会前々日から学会終了日の間、早朝から夜中までタンジブルについて議論し合うという、かなりタフな内容である。さらに参加メンバーは、全員相部屋で、ホテルでも回路設計手法に始まり大学院生のありかたや恋愛話について語り合う。英語が苦手な私には、かなり堪えた。学術的な語学力を身につけたい院生には、ぜひ挑戦してほしい Consortium である。きついが、力になる。1 週間弱のプログラム終了後には、日本語が不自由になっていたほどだ。

さておき、その Consortium の幹事の一人で、ディズニーリサーチの HCI グループ長である Ivan Pouprey 博士に、インターンとして半年働かないかとの嬉しいお誘いがあったのだ。後一人の幹事、Mark D Gross 教授がピッツバーグのカーネギー大学に研究室を持っており、その研究内容を覗いてみたいという好奇心もあり、インターンのお誘いを快諾した。

指導教員の許可をとり、学術振興会の特別研究員を途中辞退し、ビザの申請も終わり、2010 年の 11 月 13 日に私はピッツバーグ空港にいた。コンベアから出てきたスーツケースは、つがい部分が歪んで壊れかけてい

た。念のため中身を確認すると、作業用に持ってきた MacBook Pro 本体と、生活のゆとりとして持ってきた ThinkPad の AC アダプタが無い。空港の職員に訪ねると、保証はもちろん利かないし、届けられる見込みも無いとのことだった。盗まれたのだ。

到着早々に心が折れてしまったが、ホームステイ先の Alice の苦勞話を聞き、なんとか気を取り直した。Alice は台湾からアメリカに移住した方で、移民当初は、金銭的に余裕がなく、兄弟と 50 セントのポテトを分け合ったという。それを聞いて、私にはまだ iPad があるという心持ちになった。



ハイヤーの運転手が同情して、みせてくれたピッツバーグの夜景

2. 研究の取り組み方

到着から 2 日の休日をはさみ、Ivan 博士のもと研究にとりかかった。MacBook Pro は、友人に予備を郵送してもらい、研究所内での作業用 PC を与えられた途端に忙しくなった。ここから半年間、とても目まぐるしかった。

私が所属した HCI グループは、とにかく研究スピー

ドが速かった。特に、システム実装が速かった。グループメンバーが優秀であるということもあるが、主には研究の取り組み方に、速さの理由があった。

Ivan 博士は、週 1 回のグループミーティングの他に、午前 11 時ごろに 10 分間ほど、部下が今日一日どんな作業をするのかの簡単なミーティングを行っていた。彼は、この時に部下の進捗だけでなく、研究方法に間違いがないか、部下に特殊な助けが必要か確認する。もし助けが必要な場合は、すぐさま知り合いに連絡して部下の作業を手伝わせるのである。部下は、作業完了後にメールか口頭で、作業の完成度を報告して、1 日の仕事を終える。このミーティングのおかげで、毎日の作業に緊張感が生まれ、自然と手が速く動いた。

システムを実装するにあたり、行き詰まることもあった。大型装置の土台を作製しなければならなくなったとき、Ivan 博士は、前述の Mark 教授と家具の研究をしている修士学生の Eric に、私の手伝いをお願いするメールを 1 通送った。2 週間はかかると思ったが、私の簡素な設計図を見た Eric は、一晩で土台を作製した。Ivan 博士は、サンプル 3D モデル作製ですら、専門のデザイナーを呼んだ。彼は、研究所内や隣接するカーネギーメロン大学の専門家達をフル活用していた。その専門家達も我々を活用していた。これが、システム実装の速さの理由である。

3. ピッツバーグでの生活

出国から帰国までの間、研究所内の Coordinator が、私の事務作業を手伝い、航空チケットをとり、滞在先を探してくれた。まさに快適であった。ステイ先の Alice は、ピッツバーグ大学の化学の教授で、毎日私に大量の本を解説した。科学雑誌、経済学書籍、文化工芸品の解説書籍、観光地のパンフレットまで優しく解説してくれた。

4. おわりに

現地滞在中は、本当に様々な方々にお世話になった。この場をかりてお礼申し上げる。海外企業のインターン制度を利用した留学は、就職活動の一つにもなるので、大学院生にはとくにお勧めしたい。

私は、2011 年の 5 月 13 日にインターンを終了し、空港で頑丈なスーツケースを購入して帰国した。

【著者略歴】

玉城 絵美(たまき えみ) hoimei@acm.org
東京大学大学院 学際情報学府 博士課程学生



休日にピーナッツを煎る Alice



カーネギーメロン大学構内



研究所内のイベント時に、ボスの帽子をかぶり、はしゃぐ研究員